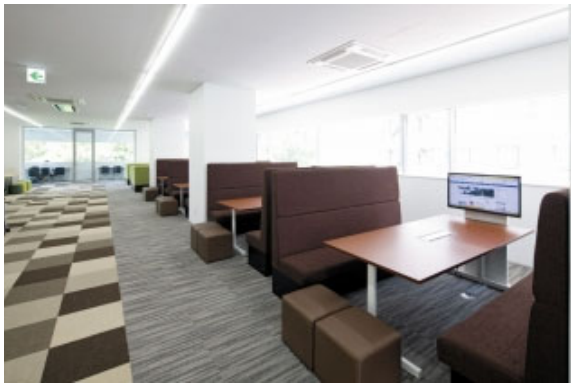
【2015年9月16日】

コモンズセンター『アクティブボックス』

みなさん、こんにちは。秋学期のオリエンテーションが終わり、大学本来の賑わいを予感させる今日この頃です。朝から曇り空でしたが、お昼になると同時に雨が降り出しました。激しくはありませんが、天気予報のとおりとなり、つくづく最近の天気予報に感心をしています。

さて、今号はコモンズセンターの人気スポットをご紹介します。連日満席状態の『アクティブボックス』です。TVモニターを利用して動画や画像を見ながら、少人数でのミーティングにぴったりのボックスシート。長時間座っていても疲れにくいソファ仕様です。背もたれが高く、隣席の学生たちの声や周囲の雑音なども気になりません。実はこの『アクティブボックス』、利用活性を検討する過程で多くの議論、考えがありました。



最近、カフェやオープンエリアで勉強している学生を多く見かけます。また、ハンバーガーショップやドーナツショップなどで勉強する高校生を見かけたりすることも少なくありません。試験前に「君たち、どこで勉強するの？」と当研究室の学生に聞いた所、「みんなでファミレスです」との返事が帰って来ました。時には「オールです」との声も。少し驚きました。しかし、よく考えてみると、私も特に出張中にハンバーガーショップやカフェを利用しますが、参考書を開いて勉強する受験生や、資格試験を目指す大人、パソコンで会社の仕事をするサラリーマンをよく見かけます。個人での利用が大半ですが、数人で集まり、議論し合って勉強をしている姿もありました。アクティブボックスはここに大きなヒントを得た訳です。

家庭の中でも、リビング・ダイニングで宿題や予復習をする小学生が増えていると言われています。積水ハウス総合住宅研究所が2007年に発表した「住まい における子どもの居どころ調査」によると、小学生の70%以上・中学生の約半数が「リビング・ダイニングで勉強している」と回答されています。かつて勉強 はひとり静かに行うものと思われていましたので、少し驚きです。しかし、我が家の息子も“子ども部屋があるのに、勉強はリビングばかり”“学習机は荷物置 き場みたい”です。リビング・ダイニングでの勉強の可否は問題点も多く考えられますので別の議論ですが、集って勉強する、関りを持って勉強するスタイルは 何か理由がありそうです。

リビングで勉強する我が家の息子たち

数年以上前になりますが、学会の特別講演において、東京都江戸東京博物館の市川寛明先生による「江戸の知恵に学ぶ　寺子屋の学びと現代」を拝聴した事を思 い出しました。市川先生は多くの史料を供覧し、当時の寺子屋における教育の特質についてお話しされました。中でも印象的だったのは、寺子屋の授業風景を描 いた二枚続きの錦絵です。生徒は必ずしも先生の方を向いて座るわけではなく、教科書も、生徒たちの年齢もばらばら、おとなしく勉強している子どもはほとん どいません。しかし、何人かのまとまりがあり、そのまとまり（グループ）内では、楽しい中に真剣に他者と関っている姿が印象的でした。それと同時に、学び への『熱さ』を感じたことを数年前のことですが、鮮明に覚えています。

また、NHK大河ドラマで話題となる吉田松陰について、明治大学の斎藤孝教授がメディアで興味深いお話をされていました。吉田松陰の膨大な手紙は、人との関りを示しているとのこと。松蔭は常に人とのやりとりの中で学び、成長する人物であったと紹介されていました。また、同じ斎藤孝教授が別の誌で、松蔭は自分の受けた感動を人に伝えずにはいられない性格だと抄されています。

これらからもわかるように、他者とのかかわりを意識しながら学修することの重要性が再確認できました。他者や外部とのかかわりをもちながら学修することができる場所の設置は、間違いでは無かったと感じています。

コモンズセンターのアクティブボックスで、熱い交流を通し、時には興奮覚めやらずに〇〇屋に場所を移して語り合ったりする。そんな日々の繰り返しが皆さんの力を養い、これからの社会であてにされることでしょう。

コモンズセンター長　伊藤　守弘